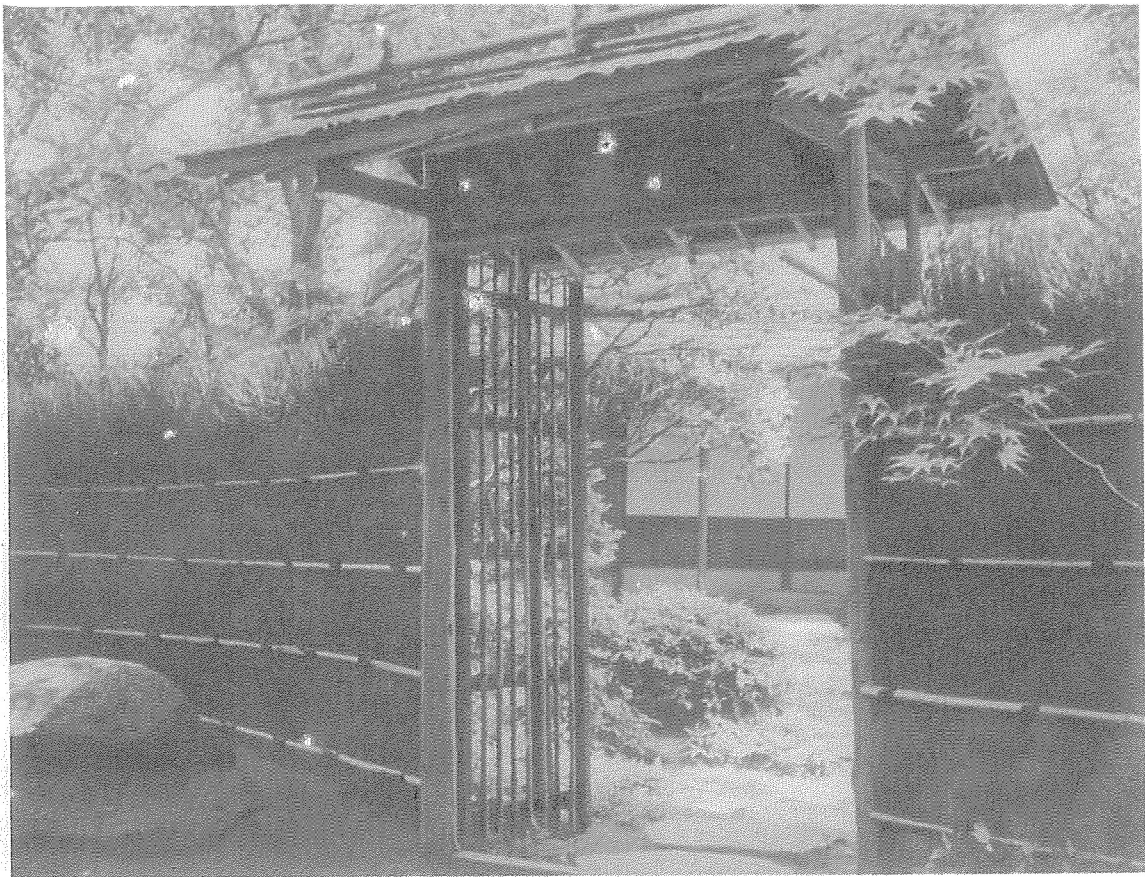


無心菴

所在——東京都北区飛鳥山龍門社邸
(舊澁澤氏邸) 内にあったが、昭和二十



年四月十五日戦災により焼失した。
由来——無心菴は明治十二年澁澤榮一氏(後の子爵)が飛鳥山の一角に別業を営んだ時に建設されたもので、益田孝男(鈍翁)の令弟益田克徳氏の設計にかゝるものと伝えられている。克徳氏は明治時代の茶人として有数なる一人であることとは申すまでもないが、その上この茶室をめぐり澁澤青淵翁の麗わしい情誼が維新史に残されている。新しい茶室であるがここに加えることにした。

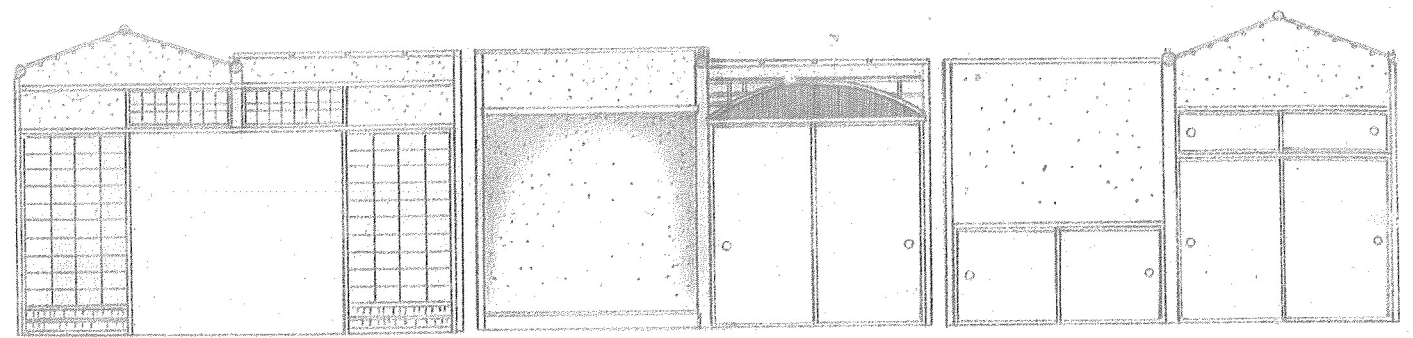
澁澤青淵翁の舊主徳川慶喜公が維新後只管恭順の意を表して蟄居していたのに、明治政府は公に對する理解を缺いていたことを嘆いて青淵翁は伊藤、井上等の諸侯を説いて慶喜公と膝を交えて大政奉還當時の公の眞意を了解せしめたのがこの席での出来事であつた。その時始めて慶喜公は水戸家傳來の尊王の大精神が大政奉還にまで出でしめ、徳川家をして朝敵の汚名より免れしめたことを公にした。この會合あつて後明治卅五年慶喜公に公爵を賜ふ因ともなつたのであつた。青淵翁はこの一件について自らその編纂の面に當つた徳川慶喜公傳中には一言も及んでいないが、この無心菴が世に隠れていたらと同様に、この佳話が世より秘められていたことは惜しい氣がする。かかる由來と、益田克徳氏の設計とを以て明治を代表する茶席としてこの席を記して置きたい。

構造と特色——無心菴は舊澁澤邸内の東南端の崖際に建てられた萱葺の棟で、建設當時は目の下一面が青田で、唯青淵翁が當時關係していた王子製紙の煙突が僅かに立つておつたという。席は別棟三疊の寄附より飛石つたいに中門を経て大廳脇に心身を淨めて躰口に向う順序であるが、この席は圖で見ると、中央四疊半に六尺五寸の疊床、床脇に台目疊を入れて向切に疊を切り、右手床脇に板を入れた廣々とした席、もし四疊半を以て小間と廣間との境界とするならば廣間

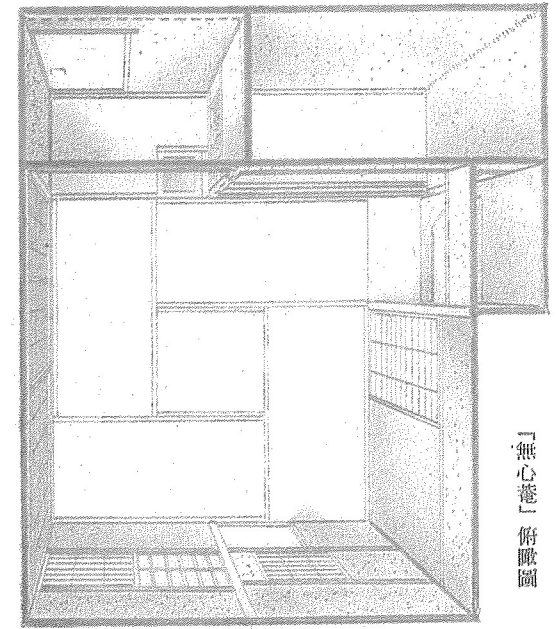
「無心菴」の中門



ともいうべき席であるが、記者は新時代の席としてこの程度の廣さは甚だ贅成である。
席の南壁中央に柱を入れて、その右側に明障子がはまり、これは給仕口というように躰口と切り、その上に下地窓、左壁には竹の蓮枝窓、西側は四枚の明障子で貴つゞく通い口と見られる。
床が幅六尺五寸もあり、東側床脇に二

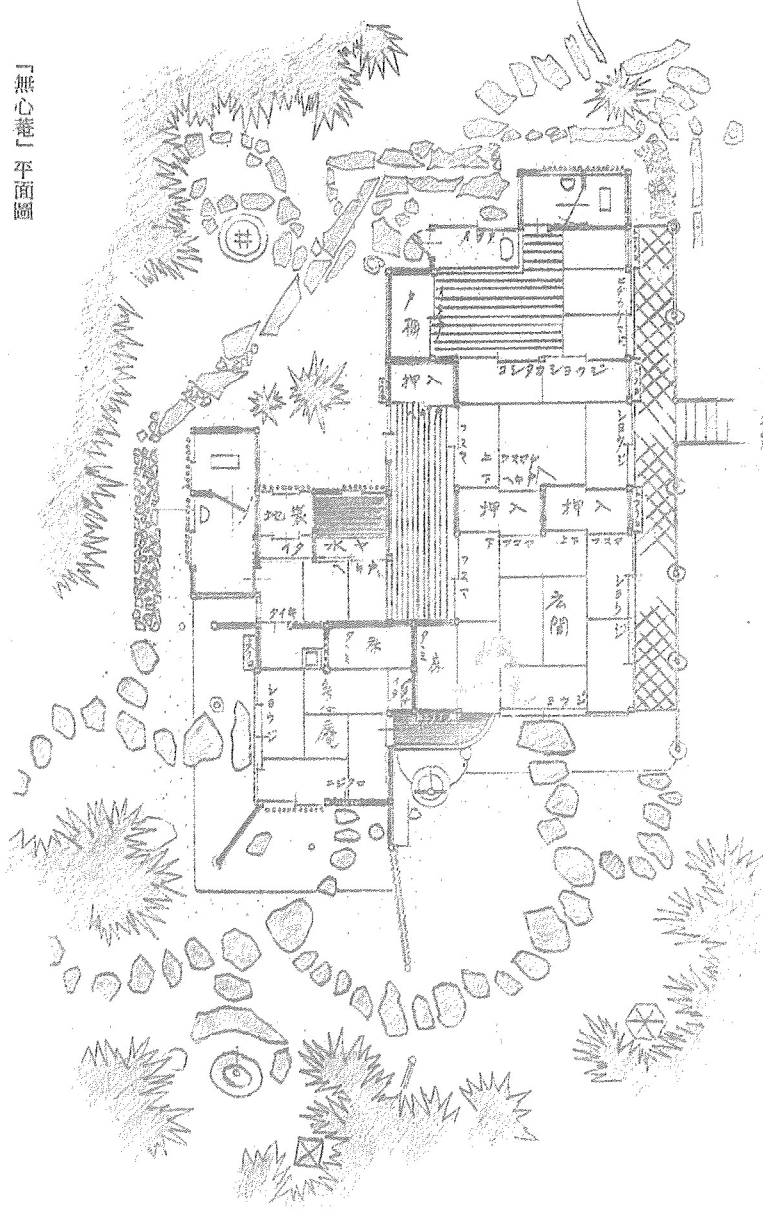


「無心菴」廣間立面圖



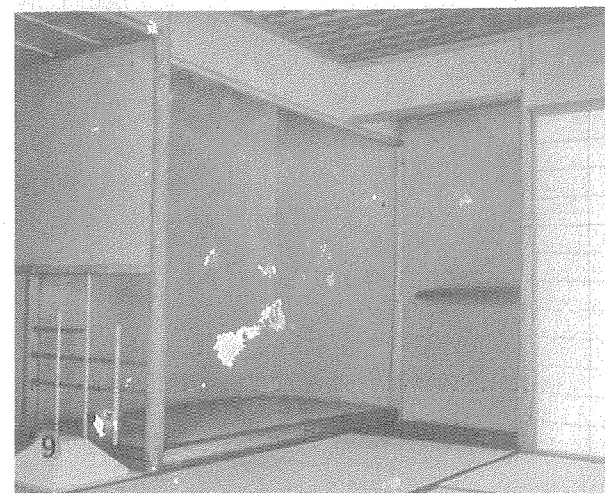
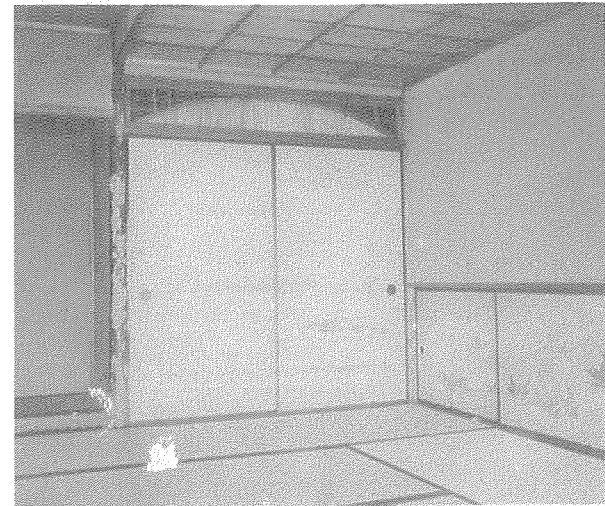
「無心菴」平面圖

「無心菴」俯瞰圖



廣間

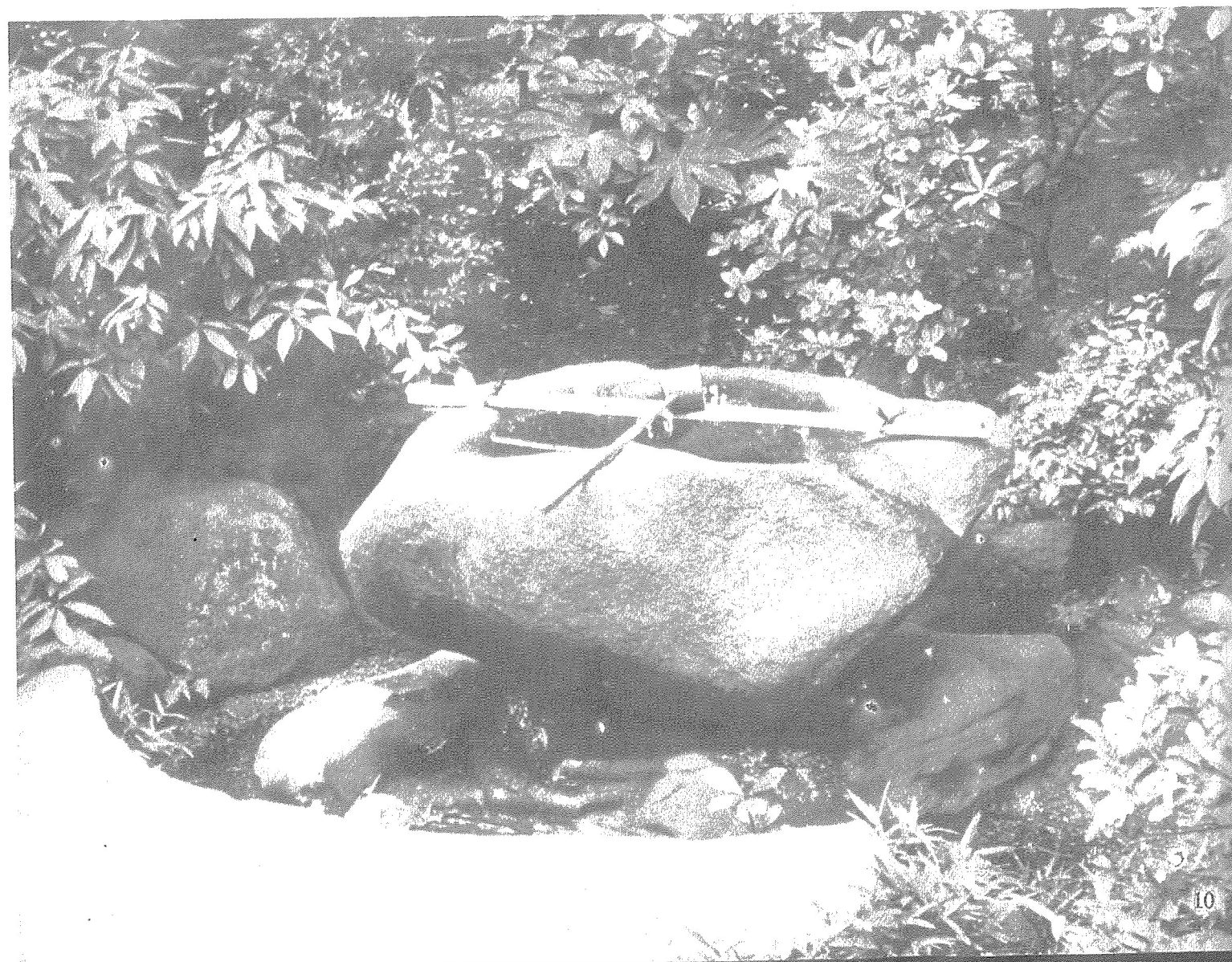
茶室の内部、床の間は床脇に板が入っているだけ廣くなっている





「無心菴」月見台、この下は昔は一面の青田であつたが、今は薨の波がつづいている。上は廣間の菅下

「無心菴」大踊庭



茶室

昭和二十四年十二月二十日印刷・同年十二月二十五日發行・昭和二十五年十月一日再版發行・著者江守奈比古旭谷左右・發行者大阪府北區中之島三の三朝日新聞社藤原惠・排字印刷製本者京都府下京區西洞院通七條南入内外印刷株式會社富森茂彰・四版印刷者大阪府北區中之島三の三朝日新聞社波々伯部方次・コロタイプ印刷者京都市中京區新町通竹屋町南入便利堂佐藤濱次郎・發行所東京都丸の内・大阪市中中之島・小倉市砂津朝日新聞社

定價千二百圓